

パネリスト 8 人、熱く語る

10/19 東京シンポジウム(国労会館)



写真左から、中井、片田、久堀、吉田、望月、竹信、木村、小林の各氏

● 刑事裁判の現状を弁護団が報告

10月19日午後、「反弾圧シンポジウム」が東京・国労会館会議室で開かれ、160人が参加した。主催は関生支部。大阪、京滋、兵庫、東海の各地の弾圧反対実行委員会が協賛した。

パネリストは、吉田美喜夫（立命館大学名誉教授）、竹信三恵子（ジャーナリスト）、望月衣塑子（ジャーナリスト）、木村真（豊中市議）、小林勝彦（全港湾大阪支部委員長）のほか、関西生コン弁護団から片田真志、久堀文、中井雅人の各弁護士の8人。

「関西生コン事件」の京都事件、コンプライアンス事件、和歌山広域協組事件について、それぞれ担当弁護士から刑事裁判の内容と問題点を報告してもらったのち、パネリストの方々からコメントしてもらう方式でパネルディスカッションは進行した。

● 欠落している観点

吉田美喜夫さんは、2019年12月の労働法学者78名の抗議声明を紹介しながら、刑事裁判では労働法的な議論がなされていないことを指摘。「一般市民ではなく労使関係の当事者である使用者の態度との関係で関生支部の行為を判断する視点が欠落している」と批判した。

竹信三恵子さんは「ひとことで言うと『差別と偏見』で作られた事件。関生支部に対するイメージを転換させることが重要だ」と指摘。望月衣塑子さんは、日本学術会議事件、森友事件をはじめ2017～2018年にかけて安倍・菅官邸が「政権に刃向かう者を厳しく弾圧して警察国家化をすすめた時期」に一連の事件が起きていたことに注意を喚起した。

● 50人のSNS部隊

4時間に及んだシンポジウムの締めくくりは今後の世論づくりについて。望月さんは都知事選で話題をさらった石丸選対には50人のSNS部隊がいたこと、それがそのまま自民党総裁選の高市選対に移ったことを紹介したうえで「ネット戦略に力を入れるべきだ」と強調した。

なお、パネリストとして登壇予定だった大石あきこ（れいわ新撰組）と大椿ゆうこ（社民党）のお二人は総選挙公示のため残念ながら欠席となった。